石川啄木一主な出来事と作品

明治	満年齢	主な出来事	主な作品
19年	0歳	岩手県玉山村の常光寺にて生まれる	
24年	5歳	渋民尋常小学校に学齢より１年早く入学	
28年	9歳	盛岡市立高等小学校に入学	
31年	12歳	岩手県立盛岡中学校に入学	
33年	15歳	堀合節子に初めての恋	
35年	16歳	盛岡中学校を中途退学して上京	
36年	17歳	上京４か月後に帰郷	
37年	18歳	堀合節子と婚約、再度上京	詩を「明星」「時代思潮」「帝国文学」「太陽」「白百合」に発表
38年	19歳	結婚	処女詩集「あこがれ」を小田島書房より刊行
			雑誌「小天地」発刊　１号で終わる
39年	20歳	渋民村の農家の一間に移る	小説「雲は天才である」「漂白」を執筆
		小学校の代用教員となる	小説「面影」を春陽堂に送るが返却される
		長女・京子生まれる	小説「葬列」が「明星」に掲載される（活字となった初めての小説）
40年	21歳	父・一禎の宝徳寺への復帰は叶わなかった	函館の同人雑誌「紅苜蓿（べにまごやし）」に詩・短歌を掲載
		一家離散	
		函館日々新聞・小樽日報の記者として働く	
41年	22歳	釧路新聞に入社	小説「菊池君」「母」「二筋の血」「刑余の叔父」「札幌」を執筆
		料亭「しゃも寅」で芸者小奴と出会う	森鴎外に、小説「病院の窓」「天鵞絨」の出版紹介を懇願
		最後の上京	短歌、石破集として「明星」に載る
			小説「鳥影」を東京日日新聞に６０回連載
42年	23歳	朝日新聞の校正係の職を得る	小説「赤痢」を「スバル」創刊号に発表
		家族が函館から上京	自伝小説「足跡（その一）」を「スバル」第２号に発表
			小説「葉書」を執筆
			評論「食ふべき詩」を東京日日新聞に連載
43年	24歳	朝日新聞歌壇の選者となる	小説「道」を「新小説」に発表
		幸徳秋水事件にショックを受ける	小説「知己の娘」「我等の一団と彼」を執筆
			評論「時代閉塞の現状」・幸徳事件関連の文章「所謂今度の事」
			歌集「一握の砂」を東雲堂より刊行
			「A LETTER FROM PRISON」を執筆
44年	25歳	腹膜炎で帝大病院に入院・手術	詩「はてしなき議論の後」を「創作」に発表
			短歌「猫を飼はば」を「詩歌」に発表
			エッセイ「病室より」を「学生」に送る
45年	26歳	４月１３日午前９時半頃、肺結核で死去	死後、第二歌集「悲しき玩具」が東雲堂より刊行された

■音響家（市来　邦比古）の紹介

1970年代、小劇場演劇の黎明期にフリーの音響家として様々な劇団・演出家と共同作業を行い、1976年、劇団第七病棟創立に参加。1969年から現在まで、プランナーとしてクレジットされた作品は500作品以上。世田谷パブリックシアターをはじめとして、北九州芸術劇場、まつもと市民芸術館など多くの音響設備設計に関わってきた。尚美学園大学などの非常勤講師もつとめる。ごく最近の作品としては、二兎社「書く女」（作・演出　永井愛）、コクーン歌舞伎2016「四谷怪談」（串田和美演出・美術）、まつもと市民芸術館企画制作　空中劇場「遥かなるブルレスケ」（串田和美潤色・演出・美術）などがある。

■客演者（松本　藍果）の紹介

10years 所属。大阪芸術大学舞台芸術科ミュージカルコース卒。エンターテインメントユニットCHARGEの活動を中心に、ミュージカル・ストレイトプレイ・TV・広告と各方面で活躍。最近の出演作には、NHK大河ドラマ「花燃ゆ」、NHK　Eテレ「オトナヘノベル」、CHARGE公演「SNOW～returns～」などがある。ジャズシンガーとして都内のライブハウスでも活動中。

岩手県民謡

南部牛追唄

～田舎なれども南部の国は
西も東も金の山
～今度来るとき持って来てたもれ
奥の深山のナギの葉を
～肥えたべこに曲木の鞍コ
金の成る木を横づけに

劇団の連絡先　☎090－6043－8303（久松）
hisamatu@s9.dion.ne.jp
劇団のホームページ　劇団こむし・こむさの部屋
http://www.ichikiyo.com/komushi.htm
劇団代表・野村勇のブログ　こむし・こむさの日々
http://komushikomusa.jugem.jp/

石川啄木生誕130周年

劇団こむし・こむさ

復活第3回公演

2016年　11月1日（火）19:00
11月2日（水）14:00　19:00
日暮里　d－倉庫

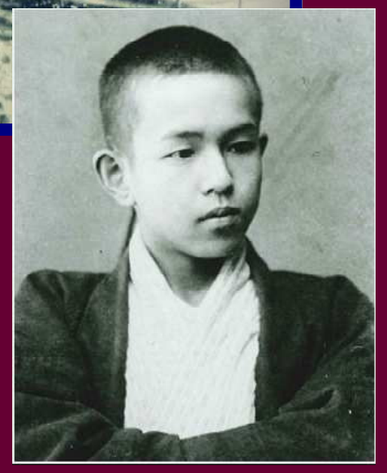
啄木の蒼き影法師

スタッフ

作・演出	野村　勇
音響	市来　邦比古
照明	安達　直美
照明協力	金原　知輝
	針谷　あゆみ
プロジェクター	陶山　嘉代
装置	野村　勇
	*
制作協力	今野　好江
	飯島　正明
	宮澤　清子
	宮崎　富美江
	鈴木　純子
	荻野谷　正博

キャスト

石川啄木の霊	市川　清文
石川一禎（いってい）の霊／金田一京助	久松　健司
芸者小奴の霊	松本　藍果（10years）
石川かつの霊／女将の声	荘司　あや子
石川節子の霊／女中の声	青木　一代
死に神	野村　勇



■作・演出より　野村　勇

本日はご来場くださいまして、誠にありがとうございます。こうして3回目を迎えられるのは、公演に足を運んでくださる皆様があってのことと、感謝しております。

前回までの舞台は、いずれも市井の、名も無い人々の姿を描いたものでした。ところが今回は、多くの方々に知られている実在の人物を舞台にのせることにしました。時代も、現代ではなく明治時代。これは、まさに私どもにとっては、新たなチャレンジでありました。

くしくも今年は「石川啄木生誕130周年」に当たります。130周年がどうした、というご意見もあるでしょうが、そんな年に石川啄木を題材にした戯曲を書き、舞台にのせることが出来ることを嬉しく感じています。

戯曲を書くときに、たくさんの資料を読み返しましたが、何故か、石川啄木の側らには、その生涯を通して、一人の人物（？）が存在しているような気がしました。その人物は、私の想像の産物ですが、肉体と言葉を与えて、舞台に登場させることにしました。

石川啄木が文学者として活動した年月は短いものです。しかし、その短い期間に、啄木は脱皮を繰り返します。詩人から歌人へ、そして小説家へ。彼が「こう在るべき」と考える小説についても、一つ所にとどまってはいません。先へ先へと進もうとします。そして、最後には思想家としての顔を見せるようになります。彼は常に何かを求めて、生きました。その啄木の怒涛のような生き方が、私には実に魅力的に映ります。

啄木はお寺の住職の息子として生まれました。ずっと、父親が寺の住職を務めていたら、啄木の生涯の苦労の半分以上は軽減されたのではないかと思います。しかし、石川家が寺から追放されてしまったために、啄木は漂泊の旅を続けることになりました。その貧しさや病いとの闘いは、劇団こむし・こむさの今までの芝居の中の、市井の人々の悲しみや辛さに通底するものだと考えています。

インターネットを見ると、啄木が借金を踏み倒したり、嘘をついたり、芸者と遊んだり、浅草の娼婦と寝たりしたことを、暴露的に書いたものがありました。それらのことは、今になって分かったことではなく、書物を読めば書いてあることです。それらを読んでも、啄木を人間として軽んじる気にならなかったのは、啄木の文学に実際に触れていたからです。2016年の今、石川啄木を取り上げるのは、インターネットに書かれた上記のような「暴露話」に対する、私なりの答を見つけたかったからかもしれません。

スポーツ選手たちが、大会が始まる前に「楽しみたいと思います」などと発言するのをよく聞きますが、実は「楽しむ」ことはとても難しいことなのではないかと思います。私たちのお芝居も、演技者たちが楽しんで演技するところまでは、まだ行っていません。しかし、少しでも、その境地に近づけないものかと思っています。そうして、観客の皆さんとお芝居の楽しさを分かち合えたらと思います。

■出演者より
“私にとっての啄木とは？”

市川　清文（石川啄木の霊）

啄木は、短歌でしか知りませんでした。というか、あえて知ろうともしていませんでした。短歌については、皆様、ご承知のとおりです。ところが、この芝居では、あえて短歌の裏側の人間啄木をえぐろうとしています。果たして啄木の人間に迫ることができるのか。シナリオは様々な実験を試みていますが、これに応えて役を作り出せるのか。格闘と葛藤の毎日です。啄木の世界に思いを広げていただければと思います。

久松　健司（石川一禎の霊／金田一京助）

啄木や幸徳秋水の時代と今が似ていると、本にありました。池上彰氏は「ソ連が崩壊したとなって」と書いていますが、むき出しの資本主義が現れてきたせいでしょうか。『金が敵（かたき）の世の中』ですが、悪いのは金ではなくて世の中の方であるのは勿論です。

松本　藍果（芸者小奴の霊）客演

私にとっての啄木は『はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざり』、の人でしかありませんでした。そんな私の中の啄木さんは、今回のこの公演で、すっかり愛すべき存在となり、しかし、自分の旦那にはしたくなく、そして、人生の先輩としては憧れたりもする、そんな存在になりました。啄木さんを少し分かった気がした今、『ぢっと手をみる』という最後が、好きだなぁと思うのです。

荘司　あや子（石川かつの霊／女将の声）

今回は啄木が主人公です。私の知らない啄木がいました。イメージが変わるかもしれませんが、楽しんでください。今回は明治なので着物にもチャレンジします。なかなか難しいですが、精一杯動かない頭と、からだを使って、みんなと力を合わせて、いい作品にしていきたいとおもっています。頑張ります。

青木　一代（石川節子の霊／女中の声）

今回は石川啄木の妻、節子を演じさせていただきます。節子像を掴めないまま稽古が進み、ようやく、あの啄木についていける人なのだから、節子もまた一般人のモノサシでは測ることが出来ない人物なのだろうと思えるようになりました。また、学生時代に覚えた（暗記した）文学者や作品がが台本に多数出てきますので、なんとも不思議な気持ちになります。これが、実在した人物を演じるということなのか！！と心の中でニタニタしながら演じています。

■照明家より　安達　直美

昨年に引き続き、今年も、野村さんの作品に関われることを嬉しく思っています。今回の舞台で、石川啄木が、どう生きぬいていってくれるか、楽しみにしてます。

父・石川一禎

＜嘉永３年（1850年）生まれ。曹洞宗の僧侶。渋民村の宝徳寺の住職を務めたが、宗費滞納との理由により罷免された。昭和２年没＞

金田一京助

＜明治15年、盛岡市の名家に生まれる。アイヌ語研究の創始者として知られ、昭和29年には文化勲章を受章。長男の春彦、孫の真澄・秀穂も言語学者。昭和46年没＞

芸者小奴

＜明治23年生まれ。啄木が交情を深めた芸妓の一人とされている。結婚・出産の後に離婚、本名の近江ジン（シゲとも）に戻って、母経営の旅館を継いだ。昭和40年没＞

母・石川かつ

＜弘化４年（1847年）南部藩士の末娘として生まれる。夫一禎との間に、サダ、とら、一（啄木）、ミツの４子をもうける。肺結核にて明治45年没＞

妻・石川節子

＜明治19年生まれ。両親に反対されたが、19歳で啄木と結婚。長女・京子を出産。長男は生後まもなく死亡。啄木の死後、次女を出産するも肺結核で大正２年に没。享年28＞

場面２　明治40年（満21歳）
一家が間借りしていた斉藤家

場面３　明治41年（満22歳）
当時の釧路市街

場面４　明治41年（満22歳）
下宿・赤心館

場面５・６　明治41年から42年
下宿・蓋平館（がいへいかん）別荘

場面７　明治42年（満23歳）
2階に間借りした床屋・喜之床

場面８　明治44年（満25歳）
腹膜炎で入院した内科病室

場面９　明治45年（満26歳）
啄木臨終の場となった借家